

住んでみて感じたマレーシア

インダストリアル東南アジア地域事務所長 岩井 伸哉

はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響で1年以上保留となっていたインダストリアル東南アジア地域事務所への赴任でしたが、ようやく2022年4月マレーシアに入国することができました。今号では、赴任生活も1年が経過し、ようやくマレーシアの生活にも慣れてきた私の目から見た、マレーシアを紹介します。

マレーシアの中の日本人

マレーシア在住の日本人は2022年10月1日時点で24545人とのこと(海外在留邦人調査統計より)。クアラルンプール市内に住んでいる日本人は12553人とマレーシアに住む日本人の半数ほどが首都クアラルンプールに暮らしています。マレーシアに住む日本人は企業の駐在員とその家族が大半ですが、それ以外にマレーシア・マイ・セカンド・ホーム制度を利用した退職後の移住、子弟をインターナショナルスクールに通わせるための家族(母子も

しくは父子)での留学、現地採用などの方もおられます。現地採用は日本でネット販売を展開する企業のコールセンターが多く、日本人向けの求人広告も数多く出されており、月8000RM(約24万円)の給与額が提示されています。

物価事情

クアラルンプールは緑が多く、その中にタワー型のオフィスビルやアパートメントが林立して、その間を縫うように高架道路や高速道路、MRTなどの電車の高架線が走っているという、未来都市のような容観をしています。巨大なショッピングモールも数多く建設されており、日系ではイオンやらぼーなどの百貨店、ドン・キホーテや業務スーパーなどが進出しており、日本のものを購入することはあまり難しくありません。

輸入品の購入は難しくはないですが高額な関税がかけられているようで、高価格という印象があります。日本では30円のベビースターラーメン

がこちらでは3RM(約90円)と3倍の値段です。特にアルコール飲料は非常に高く、ビール1缶(330ml)が約16RM(約500円)、紙パックの日本酒が100RM(約3000円)です。マレーシアの酒税はノルウェー、シンガポールに次ぎ世界で3番目に高いそうです。ただ、韓国焼酎が日本の焼酎や酒に比べて安いのが不思議です。

国内産の物品は総じて安く、それは政府が補助金を出しているからとのこと。鶏肉、食用油、米や小麦粉は世界価格が上昇しているにも関わらず、国内価格の変動は抑えられています。公設の市場もあり、スーパーマーケットの半額程度で国内産野菜などを買うことができます。しかし市場に行くには車が必要であり、生鮮食品は足がはやいので購入には注意が必要です。

ガソリン価格はリッター約2RM(約60円)と非常に安いです。光熱費は使い方によって違いますが、電気料金はおおよそ月200RM(約6000円)、プロパンガスは小型ボンベ

(2カ月分程度)が40RM(約1200円)程度、これらの燃料にも補助金が出ているとのこと。東京と比較して大きく違うのは家賃です。日系企業の駐在の方がよく住んでいる高級アパートは月6000RM(約18万円)ですが、東京の半額の家賃で広さは2倍程度と住みやすいところではあります。これらの物価を考えると東京よりも安く生活できるのではないかと考えられますが、便利で「和」な生活を求めるとそれほど安くはない印象です。

外食事情

事務所近くの食堂では昼食が安い10RM(約300円)前後です。食堂ではお皿にご飯を盛り、その上



中華系食堂にて。ご飯におかずを乗せたランチ。7リングット也

春節の天后宮 (中華寺院)



にカレーなどの汁物(激辛注意)や炒め物、フライドチキンなどをのせて会計をします。飲み物は2RM(約60円)で、この上なく甘いミルクコーヒーや砂糖を飲んでいるような味のミルクティーを注文することが多いです。ショッピングモールのレストランでは20RMから30RM(約600円から900円)ですが、日系ラーメンは1000円以上します。また日本資本のような名前で実はそうではない回転すし屋は一貫300円以上、刺身はサーモンしかありません。「なんちゃって和食」や「なんとなく和食」も多いのですが、それほど安いわけでもありません。本格和食となるとやはり高く、300RM(約9000円)以上になるような値段です。

多言語国家からの変化

マレーシアへの直接投資や事業の展開や移住などが「お勧め」とされている理由の一つに英語が通じる、ということが挙げられています。もち

ろん日本人の多くが居住している地域や大型ショッピングモールなどでは、時には日本語を流ちょうに使いこなす方もいますが、それ以外の地域ではマレー語が主流になっています。1994年に初めてマレーシアに出張したときは、労働組合の役員は総じて全員英語で発言されましたが、今はそうではない場面が多い印象です。以前は学校教育においてマレー語のほかには英語、北京語やタミル語(インド系マレーシア人の使う言葉)などの授業もあり、また各言語の公立学校も設置されていたようです。しかし現在では、公立学校は基本的にマレー語のみ、他の言語は私立学校に通うか家庭内での会話のみということも多いようです。名前から中華系だろうと思ひ、漢字で筆談しようとしたら「漢字はわからない」と言われたことが何度かありました。

地域事務所の仲間たち

最後に東南アジア地域事務所のスタッフを紹介します。総務・

財政担当はセア・リム・キヤウ(謝錦嬌)さんです。名前の頭文字をとってLKさんと呼んでいます。地域事務所やプロジェクトの会計、ビザや旅行、会議の手配な

ど全般の業務をこなしています。英語、北京語、福建語などに堪能です。

主にセクター(部門別)活動を担当しているのが、ロルナ・フェラーです。ロルナと呼んでいます。プロジェクト運営にも知見があり、相談を受けることも多々あります。セクター活動のほかにはホワイトカラーやジェンダーの担当も担っています。

広報・調査担当はン・ヤップ・フワ(黄業華)さんです。ヤップと呼んでいます。インダストリアルウェアのウェブサイトに掲載記事の原稿、東南アジア各国の労働情勢やデータベース作成、労働法や最低賃金の比較分析など多岐にわたる調査も行っています。労使紛争案件に関する対応も担っています。中華系マレーシア人で、英語、マレー語、インドネシア語、北京語に加え、中国語方言の潮州語や福建語を駆使して様々な組織のリーダーたちと人脈を築いています。

トルコ出身のゴキヌヌール・マルシユさんは、地域事務所プロジェクトを担当です。アジア太平洋地域で展開されているプロジェクトを一手に引き受けています。トルコ語の名前の発音は難しいのでゴクヌールと呼んでいます。

ロルナと同様にフィリピンでプロジェクトコーディネーターとして地域

事務所のプロジェクト活動を手伝っていたのがラモン・セルテザさんです。モンと呼んでいます。現在はクロスセクターの活動を担当しています。フィリピンの加盟組織との調整も担っています。

コロナ後の活動

2020年からの新型コロナウイルスの影響により、この2年間、多くの活動が中止またはリモート会議になりましたが、ようやく東南アジア地域では移動が自由化され、対面会議の機会も増えています。これまでのリモート会議運営の経験を活かしたより効率的で多面的な活動を展開し、より多くの加盟組織とその組合員のみなさんの参加が確保できるようにしていきたいと考えています。



岩井 伸哉

いわい・しんや

1992年11月金属労協に入局。国際局で部長として国内・海外労使セミナーや労使紛争対策を担当。2022年1月インダストリアル東南アジア事務所に就任。2022年4月1日から家族同伴でマレーシア・クアラルンプールにあるインダストリアル東南アジア事務所に赴任、現在に至る。